

平成6年度入塾祭記念講演 『三つの中国と日本』
東京外国語大学教授（当時） 中嶋嶺雄氏

皆さん、こんにちは。本日は大変おめでたい入塾祭にお招きを頂きまして光栄に思っています。また、ただ今前川塾長から大変過分な紹介を頂きまして恐縮しております。私は東京外国語大学で、国際関係論、特に中国・東アジアの問題を講義し、研究しております。

文化大革命というお話が出ましたが、皆さんもあるいは“ワイルド・スワソン”等お読みになって、中国における文化大革命がいかに悲劇的なものであったかをお知りになっているかと思います。私自身も、30年近く前になりますけれど、1966年に初めて中国を訪れました。ちょうど文化大革命が始まったばかりでした。

その後あっという間に時間が過ぎてしまいましたが、今でも忘れ難いことは、文化大革命というのは実は文字でいくら書いてもなかなか表現しにくい。つまり、あの熱狂的な文化大革命の喧噪というか、スローガン、歌、踊り、そういうものを描写しない限りなかなか再現しにくいと思います。当時写真はかなり撮ってきたのですが、テープレコーダーは持っていくことができなくて、今でも「もし音を記録していたら文革の状況がもっと生々しく再現できたのではないか」と残念に思っております。

しかしながら中国の当時のドラマとは、中国共産党のトップの激しい権力闘争でありました。私自身「ここが文化大革命の問題の焦点だ」という風に分かったのは、中国革命の指導者であり生みの親である孫文の生誕百周年記念大会に列する機会があったからです。

大会が始まる前に、周恩来首相らと我々日本の代表団との記念撮影がありました。ところが中国の要人が雛壇に並ぶという時に、肝心の国家主席が見えないのです。当時の国家主席は、中国革命で毛沢東に次ぐナンバー2と呼ばれるほど大きな存在であった劉少奇でしたが、彼の姿が見えなかった。それから、党の総書記を務めてきた鄧小平。今日ラストエンペラーと呼ばれるぐらい、この夏九十歳になるというのに依然として今の中国に君臨している鄧小平の姿も見えなかった。これはおかしいと思っていたところ、雛壇の上に全員が勢揃いした後、別の入り口からこの2人が登壇しました。

それを見ていて私は「ここに問題がある」とすぐに直感致しました。やがて、孫文生誕百周年記念ですから孫文夫人宋慶齡さんなども話をされたのですが、一番メインは周恩来首相のスピーチでありました。その周恩来首相のスピーチで今も耳に残っているのは、あれほどの周恩来氏もこの演説の最後には「毛沢東語録」をふって、毛沢東万歳を唱えていたことです。そして同時に周恩来首相は「いかなる偉大な革命家であっても晩節を汚す者には未来はない。革命というのは晩年が大事なんだ。晩節を汚す革命家には未来がない」と言ったのです。

これはまさに劉少奇さんのことを指していたと思います。劉少奇氏は、中国革命の貢献度から言えば、毛沢東に次ぐ存在であったと思います。特に革命の苦難の時期に、毛沢東は農村で革命をやっていたのですが、劉少奇は都市において、労働運動中心に大変困難な革命運動をやっていたのです。それが、晩年になって毛沢東に背いた。毛沢東の「大躍進」政策であるとか人民公社の政策その他にはいろいろな無理がありましたから、それに対して批判を提起したということなのでしょう。そういう場面が目の前で繰り広げられていたわけです。

その時に私は劉少奇氏を見つめておりましたけれど、禁煙の人民大会堂のなかで、劉少奇は顔面蒼白でいらいらして、タバコを吸い始めました。灰皿がないのでどうするかと見ていると、お茶のふたに吸いがらをすりつけていて、タバコをたて続けに吸っていたことを思い出します。

もう一人鄧小平氏。鄧小平氏はもともと個性的な顔立ちなのですが、ものすごい怖い顔をしまして、「今に見てる」と言わんばかりに、周恩来をにらみつけておりましたね。この時の顔が私は今でも忘れられません。

つまり、この瞬間が文化大革命の非常に大きな一つの山場、出発点における大きな分かれ目でした。それまでは周恩来氏も劉少奇氏や鄧小平氏と共にやってきた。にもかかわらず、当時実権派と言われた人たちからすれば「自分達と袂を分って毛沢東にかけた」周恩来を睨み返したというこの図式。

これはその後の政治状況の中でも、この謎は解かれていないのではないのでしょうか。周恩来氏はあれほど重要な役割を担い、しかも文化大革命の一時期は、四人組として批判された江青夫人をも抱えている場面があります。にもかかわらず、彼は非常に中国民衆から慕われておるわけです。あの林彪事件。林彪とは、これまた文化大革命の時に今の劉少奇や鄧小平を打倒するために軍を率いて毛沢東を担いだ人ですね。なぜ突如として北京を脱出して、ソ連に逃亡する途中でモンゴルで死ななければならなかったのか。ここにも大きな謎があります。この辺はまだ残された課題だろうと思います。

今私がなぜそう言うことを申し上げたかと言いますと、1966年の10月12日に目の前に繰り広げられたドラマを外国人として見ただけでも、文化大革命の構図というのは透けて見えたような気がします。そういう、いわば党内の権力闘争が、文化大革命の本質でありました。権力闘争が中国共産党の中央ないしは上層だけであれば、「ワイルド・スワン」が描くような悲劇は起こらなかったと思います。ところが文化大革命の場合には、党内闘争が大衆運動化されまして、全中国社会を巻き込んでいったのです。トップの争いが、社会の一番底辺というか末端というか、最も社会の基盤となるところ、職場や学校、農村では人民公社の生産隊であるとか、都市では町の居民委員会、つまり隣組、あるいは家の中、家族の中まで降りていって「お前は敵か味方か」とやったわけですね。子どもが親を告発することもありました。ここに中国の悲劇の本質があったのではないかと思います。

恐らくこれは、かつてのソ連で進んでいた肅正とは違ったものだと思います。スターリンの肅正というものも大変なものでしたが、これは党の上層部あるいは

は関係者だけで悲劇が起こったとっていいのかも知れません。それに比べて中国は、全中国社会を末端から巻き込むような、党内闘争の大衆運動化というパターンだろうと思います。ここに大きな悲劇がありました。

そうしますと、今の中国はどうか。文化大革命の悲劇を体験しているだけに、鄧小平氏を始め、中国の指導者は2度とあのようなことを繰り返したくないでしょうし、多くの民衆もそう思っているに違いありません。ただ問題は、中国社会というところは私が今申し上げましたように、この権力構造が必ずしも制度化されずに、大衆社会の中に、きちんとしたシステムとして成り立たないで存在していますから、もしも何か一つ基盤が弛みますと、大衆を巻き込む動乱、争乱になる可能性をいつも秘めている社会ではないかと思います。

天安門事件は今年の6月が5周年です。みなさんも天安門事件のことはご承知だと思います。あの北京の天安門広場が、多いときには百万あるいは2百万に近い規模の、民主化を求める学生達で毎日埋め尽くされました。特に、破壊する前のソ連の、ペレストロイカやソ連社会の改革の旗手とされていたゴルバチョフさんが訪中したのは1989年の5月でしたが、この時期も大変なものでした。

天安門事件もまかり間違えば、文化大革命とは構造は違いながらも、権力闘争が大衆運動化されて中国社会がものすごく流動化する可能性を持っていたと思います。当時の中国の公的な指導者は趙紫陽さんが党総書記でした。鄧小平氏はものすごい権力をもった実質的な指導者ですが、形の上では趙紫陽さんが中国共産党を率いる形になっていまして、国務院は李鵬首相という構造でした。

ご承知のように、趙紫陽さん、あるいは天安門事件の直前に亡くなった胡耀邦さんといった人達は、胡耀邦さんも日本に来て大変人気を博したことにもみられるように、体は小さいけれど、非常に磊落というか豪快なパーソナリティを持っている人ですから、やはり鄧小平さんが全てを決めるような政治は困るという風に考え始めていたんですね。ですからそういうことが段々伝わっていった北京の知識人や学生は、胡耀邦氏の死を悼む形で問題を提起しました。そしてこの5年前の民主化運動が沸き上がっていたんですね。

ちょうどそのころ北京が大変な状態になっていきます。そしてその盛りあがりの中で、党の最高指導者である趙紫陽氏はゴルバチョフ訪中の機会にここぞとばかりに次のようなことを言いました。「中国におけるあらゆる意思決定、政策決定は最終的に鄧小平同志に委ねられております」。ゴルバチョフさんの目の前で、しかもテレビが放映しているときに叫んだんですね。

あれは1989年の5月15日にゴルバチョフさんが来て、翌16日でした。たまたま私はNHKのスタジオで解説を頼まれておりました。今でこそソ連はなくなって勢いがなくなりましたが、ソ連というのは本当に戦後、大きな存在に見えました。そして中国といがみ合ってしまったんですね。ゴルバチョフ・趙紫陽会談というのは、中国とソ連の共産党の首脳が30年にわたる中

ソ対立を改善するために、ゴルバチョフさんがやってきた。本来はこれが主なニュースだったんです。ところが中国の学生たちは、ゴルバチョフをだしに使ってというと語弊があるかも知れませんが、この機会を捉えて民主化の運動をわあっと昂揚させていきました。

この世紀の中ソ会談を、16日の午後5時から最初の10分間だけは全世界に放映しましょう、ということになり、両首脳は初めて会うわけですから、気候のあいさつとか北京はどうでしたかとか、昨夜はゆっくりお休みになれましたかということをお初めに言う予定でした。だからこそ、そういう差し障りのない部分は世界に放映しよう、と約束していたのです。

趙紫陽さんにしてみると、この機会しかなかったのです。彼は、当時鄧小平さんや李鵬さんとの間に溝ができて、段々孤立してゆくわけですから彼はここぞとばかり、テレビに放映されるということを意識した上で左手を高く揚げまして、冒頭から「中国における最終的な意思決定は鄧小平同志に委ねられる。これは13回党大会の第一回中央委員会総会の秘密決議だ」ということを言いました。

私自身もびっくりしました。それを機会にわあっと趙紫陽を盛り立てる動きが進んでいったと思います。翌日の北京のデモは数十万から百万人規模になり、5月17日、18日と『打倒李鵬・鄧小平引き下され！』というスローガンが広場を埋めました。そして、追いつめられていたからこそそんなドラマを演ぜざるを得なかった趙紫陽さんの方に余裕が出てきた。彼はハンストをやっていた天安門広場の学生を深夜から早朝にかけて見舞って、「自分がここに来るのが遅すぎた」と言って涙を流しました。この画面をあるいはみなさんは覚えていらっしゃるかも知れません。

当に非常にドラマチックなのですが、言ってみれば、トップの権力闘争が民主化を求める学生たちの大衆運動と結びつこうとしたんですね。それで非常に危機的な状況に陥った鄧小平さんや李鵬さんは、北京に戒厳令を発して事態を收拾しようとした。しかも戒厳令を発したその日、趙紫陽氏は行方不明になってしまいました。それ以来今日に至るまで、趙紫陽氏は公衆の面前に正式に姿を表していません。しかも彼は合法的に中国共産党の党大会で総書記に選ばれた人であります。今の中国の改革・開放という路線は、趙紫陽さんが一番熱心に進めようとしたのです。

趙紫陽さんはその前の13回党大会では大会の報告をしまして、社会主義初級段階論、「社会主義はまだ初級段階だからこそもっと資本主義的要素を入れなくてはならない」というテーゼを打ち立てました。それから沿海地区経済発展戦略といいまして「中国は非常に経済的に立ち遅れているから、大陸沿岸の海に沿った沿海地区に経済特区や開放都市を設けて、外の活力あるアジアNIESや日本、アメリカなどの西側の経済を結んで中国の経済を発展させるのだ」という政策を提示したんです。

私もかなり長い間中国の研究をしておりますが、大体中国共産党の指導者の演説や報告というのは、ロクに読まないという語弊がありますが、読んでも

面白くない。決まり切ったことしか言っていない。それでいつもレーニンとかマルクスとか毛沢東を引用して終わっていて、あんまり読んでも意味がない。ところが13回党大会の時の趙紫陽の報告というのは、私がゴルバチョフが登場したときに彼のウラジオストック演説を読んで「これはすごいな、ソ連も本当のことを言う指導者が出てきた」と感じたのと同じように、あちこちにたくさん線を引いて読まざるを得ないほど、中味の濃いものでした。

これで中国は変わるかもしれないな、と思いました。しかし、やはりこの延長線上では、法律による政治「法治」ではなく、鄧小平氏の、一党独裁のみならず全てを自分の意向だけで決めようとする、人による政治「人治」では、趙紫陽の報告に見られる彼の理念や哲学にとても合わないだろう、と想像していたらそういうことになりました。従って趙紫陽氏はそういう形で失墜させられたわけです。

もしもあのときに趙紫陽氏がもっと戦略に長けていて、あるいはもっと人が悪かったら、あのわあっと盛り上がった勢いの中で軍も警察も公安も二分されたわけですから、そちらの方を動かして、鄧小平氏と李鵬氏を逆に捕まえてしまったらどうなったか。逆のことが起きる可能性も十分ありました。そうしたら中国が東欧に先駆けて、あっと言う間に共産体制が崩壊したのではないかと思います。実際には趙紫陽氏が軟禁されてしまった。そのことがよかったのかどうかは歴史が判断することになりますけれど。

そういう状況の中で中国は天安門事件、あの学生達を銃撃するという大変な悲劇をもたらして、全世界にそのことが知れ渡ることになりました。そして今日の改革・開放に邁進しているわけです。

しかしながらこの間にどういうことが起きたかというと、1989年の中国の悲劇を代償として、それを生け贄にするような形で、東欧諸国があっと言う間に共産体制から離脱してゆきました。ガタガタと崩れて行きました。しかもルーマニアを除いた全ての東欧の共産党圏では、自ら大衆の批判の前に屈服し、城を明け渡したのです。

例えば東ドイツのホーネッカー議長の一党独裁体制というのは大変なものでしたね。それなのにホーネッカー議長は自ら城を明け渡しました。その時に彼の意識にあったのは「自分は鄧小平のようにはなりたくない」という意識だったのです。鄧小平氏は学生達や民主化を求める知識人達を暴乱分子、反乱分子だとして「やっちまえ！」と言ったわけです。しかしながら北京の軍部はなかなか動かない。自分の娘や息子がデモに行っているからです。現に私の所に来ている留学生にも「お父さんは党に務めているから押さえる側でお母さんは学者でもってデモに行っている」ということがあります。そこで二十七軍とか、北京ではない辺境、あるいは北京軍部の中でもモンゴルの方に展開しているような軍を導入してあの天安門事件の銃撃を断行させたのです。

こういうことを考えますと、歴史はものすごい勢いで動きましたし、やはり中国の出来事がなければ、東欧諸国はああは簡単に崩れなかったのではない

か。そして自分は最後まで権力を握るんだと言った、ルーマニアのチャウシェスクは中国を見習おうとしたのです。

ご承知のように当時中国が東欧の中で一番仲のよかった国はルーマニアでした。その前はアルバニアという東欧の小さな国と中国は非常に仲がよかったです。エンベル・ホッジャという独裁者がいまして、もう何かあるとアルバニア、アルバニアといったものでした。ところが、その当時はチャウシェスクと非常に仲がよかった。

天安門事件が起こった後、西側諸国は非常に驚いて中国を非難したり経済制裁をしたりしました。今の江沢民が鄧小平さんに引き上げられて、趙紫陽さんの後に総書記になった。その時にすぐ祝電を打ったのは、北朝鮮の金日成主席、ルーマニアのチャウシェスク大統領、そして何もわからずに恐らく外務省の役人のいうまま祝電を打ったと思われる、日本の宇野首相でした。ですから当時宇野さんは、世界の独裁者と共に非常に中国に受け入れられたのです。その直前に北京を訪れたばかりのゴルバチョフさんは、本当は中国共産党と関係を修復してよりを戻したばかりですから、すぐ祝電を打たなきゃいけなかったわけですが、自分が行った時に大歓迎してくれた学生達が銃撃されたものですから祝電は打たなかったですね。最終的には打ちましたけど、祝電を打つまでに4日間かかりました。ここに当時のソ連の立場が現れていたと思います。

私は天安門事件が起きた後『中国の悲劇』という本を講談社から書き下ろしまして、それが脱稿した翌日に東ドイツに行きました。東ベルリンの壁のすぐ横に、かつてはカール・マルクスも教鞭を取ったと言われるフンボルト大学という由緒ある大学がありますが、そこで中国セミナーをやるから来てくれ、と言われて、そこへ行って、中国情勢の分析をお話しました。

東独の知識人達は、やがてこのカール・マルクス広場が第2の天安門広場になるとみんな思っていました。と言うのは、ベルリンの壁がまだありましたから、壁は超えられなかった。従って民衆はハンガリー、オーストリアを經由して西側へと流れ込んでいったわけです。当時、東ドイツの共産党に対する批判の声は澎湃と起こり始めておりました。知識人や学生達が立ち上がったら、ホーネッカー議長は独裁者ですから必ずや我々を抑圧するだろうから、真剣に天安門事件について学びたいということだったんですね。

結果的には彼は自分は第二の鄧小平になりたくない、天安門事件を越したくない、ということで引き下がっていったわけでありました。そこが鄧小平さんとホーネッカーさんの違いでしょうね。そして最後まで権力にしがみつこうとしたチャウシェスクさんは、あのような断末魔を遂げていきました。東欧の変化がソ連の解体に繋がっていったことは言うまでもありません。

そうしますと、天安門から始まって歴史は瞬く間にユーラシア大陸を横断して東ヨーロッパからソ連そしてモンゴルまで、あっという間に社会主義体制が壊れていったんです。そうしますと、それが中国に押し寄せようとしているのは、歴史の潮流だと言っていいと思います。しかも中国がこれまで社会主義国家として実りある成果を遂げてきたのならともかく、文化大革命「大躍進」政

策、人民公社と、いろいろ社会に犠牲を強いてきました。そういう意味では、中国が将来も中華人民共和国、社会主義革命国家として存立し得るという状況は、非常に脆弱だと見ていいと思います。

東欧諸国がなぜそんなに中国の出来事に敏感に反応したかということ、やっぱりそこは同じ社会主義国家だからなんですね。私は去年の秋まで1年間、カリフォルニア大学サンディエゴ校の大学院で教えておりましたが、テレビを見ていますと、今でも中国問題が話題になると、アメリカのメディアは必ず天安門事件のあの暴虐の場面を映し出します。

中国は今「改革・開放」でこれからアメリカのマーケットが中国に広がる、ある種の中国ブームなんです。にも関わらずここだけは忘れてはいけないぞということを知らせようとする一線を貫いてますね。ですから、アメリカの世論とか議会は今でも圧倒的に中国に対して厳しい。

人権問題、いわゆるhuman rightsの問題では、この間のクリストファー国務長官の訪問の時も、細川さんとは随分違いました。丁々発止やりあってますね。こういうところがアメリカの一つの価値観の現れであろうと思います。

しかしながらアメリカや日本が中国を見た場合に、やっぱりこれは自分のこととしては考えませんね。社会主義国はそれを自分のこととして考えたわけです。こういう状況の中で非常に、相互に影響し合う度合いは強いと思いますが、中国としてはなんとしてでもこの脱社会主義の潮流は食い止めなくてはならない。

ですから、今の鄧小平さんもものすごい体制的危機感を持っていると思います。世界で共産党の独裁体制を甘受しているところは中国と北朝鮮、キューバ、ベトナムも残っていますが、非常に急速に変化してしまっています。カンボジアはPKO問題で非常にいろいろ論議されましたけど、肝心の政治体制がどうかということはいまだにあまり知られていません。ポルポト派を巡る内紛だけが新聞紙上に出ていましたが、カンボジア与党は人民革命党という、ベトナムに支援されたカンボジア共産党だったんですが、人民革命党は3年前にあっという間に革命とか社会主義の旗を降ろしてしまっただけで、ちょうどモンゴルと同じような形になりました。インドシナ半島に於ける共産体制の本家本元のベトナムも、もう本音は共産主義の旗は降ろそうとしています。

そこで中国は、まず第一に今の歴史の潮流をなんとしても食い止めよう。万里の長城があるじゃないか。中国は「万里の長城を鋼鉄で築け」というスローガンを掲げました。そしてこの社会主義が中から変化してゆく潮流を「和平演変」だと唱えました。平和的に演じられる変化。“peaceful revolution”と英語では表現します。そういうことがあってはならない。だからあくまでも「4つの基本原則」共産党の指導、人民民主主義独裁、マルクス・レーニン主義、及び毛沢東思想。こういうものを掲げるんだというのが今の中国共産党の立場です。

ですから、つい最近も中国で反体制運動の指導者達が次々に拘束されたり抑圧されたりしていますね。中国は今、社会主義市場経済といって、西側と同じ

ようなことを経済の上でやろうとしているんだから、もうちょっと物わかりがよくなってほしいと思うんですが、依然としてこの点では厳しい。以前よりも厳しいとっていいでしょう。

特に私が注目するのは、国家安全法というものが一昨年から施行されました、例えば都市においては居民委員会のレベルから少しでも民主化運動に荷担したり、あるいは西側諸国と同じような価値観を鼓吹する者が出てきたら摘発してよいとする法律が決まりました。ですから、非常にその点厳しいわけで、中国の国内例えば北京大学で、世界の社会主義は変わったじゃないかとか、もうソ連も社会主義ではなくなったとか、そういうことを自由に論議する余地はない。

もう一つ中国は、当時趙紫陽さんの掲げた政策ですけれども、政治的には趙紫陽さんを失脚させておいて、政策的には趙紫陽さんの政策を全部今の指導者たちはもらってしまった、と言ってよいでしょう。これはある意味では大変賢いことなんです。社会主義に市場経済、ということを使い始めましたね。市場経済と社会主義というのは矛盾するわけです。けれど、それをやるんだといって、経済改革、経済開放政策を多いに鼓吹しています。

天安門事件以降中国の経済は急速に成長しました。昨年も一昨年も13%の伸びなんです。ただ、問題は今後もそれが持続されるかどうかということです。

それから経済成長は激しいんですけども、その間にもものすごくいろいろな矛盾が出てきています。中国の経済成長が急速であるのは、一つには毛沢東時代以来ずっと、中国では資本主義的な動機というのは一切抑えてきて、利益を得ることは罪悪だと教えられてきた。「改革・開放」を一口で言うと、お金を儲けていいということです。いろいろ議論はありますが、わかりやすく言えば、金を儲けていいということを初めて許したんですね。その途端、中国社会は初めて底辺から変わり始めたと言っていいと思います。

以前は中国というと人民公社でした。中国に行けば、みんな人民公社を見学させられたものです。人民公社こそ共産主義への一番基本的な単位であり、これはまさにコミュンである、人類の理想だと言わんばかりの議論もありました。

ところが、80年代の半ばに、鄧小平さんが人民公社はいらないと言ったんですね。そしたら、あれ程に毛沢東思想のシンボルと言われていたような人民公社が一拳になくなってしまいました。それはいかに人民公社というのが中国社会に根付いてなかったかということなんです。

それはあたかもソ連と言う国があんなに威張っていて、いつも何か言えばソ連ソ連...、ソビエト社会主義共和国連邦ということのをどれほど唱えていたか知れないけれど、肝心のソ連の国民は、それぞれ、ロシア人、ウクライナ人、アルメニア人というようなアイデンティティは持っていたけれど、ソ連人だというアイデンティティは全く持っていなかった。国や党が作ろうとしていた意識が全く備わっていなかったために、あっと言う間にソ連が解体してしまいましたね。

それと同じことで、中国における毛沢東思想の産物はあつと言う間に消えて行ってしまいました。それは、本当に根を張っていなかったからです。80年代の半ばに人民公社がなくなって、農民達は普通の農民に戻っていったのです。そして、自分達で創意工夫して一所懸命お金を儲けよう、自由市場でモノを売ることができる。あるいは経済特区の市場へ持って行くことができる。品質のよいモノは、そこで一つの企業を作って輸出することもできるわけですから、みんなやる気がでてきた。それまでは、理想を求めていたけれど、言ってみれば貧困のユートピアです。貧困のユートピアに慣らされてきた中国の中で富、あるいは利益という概念を与えられた時に中国社会は大きく変わってきました。

同時に、当時の中国はまだまだ何もなかった。今でも全中国的に平均すると、1人当たりのGNPは350ドルくらいで、日本と比べると、80対1ぐらいの格差が依然としてあるわけです。ですからそういう低い水準の所の政策が変わりましたから、その初期的な波及効果はものすごかったんですね。しかも、投資をするといった従来と違った土壌がありますから、投資効率もいいということから外国資本もあつと言う間に急速に資本投下が進みました。そして13%というような驚異的経済成長を遂げて、今日に至っているんですが、そこには大きく分けて二つの重要な問題があります。

一つは、社会主義市場経済という矛盾をどうするか。鄧小平さんは力によって民主化運動を抑えましたけれど、国家安全法など施行して、いわば軍事国家的な面をつくってしまっている。そして冷戦が終わって全世界的な軍縮傾向があるというのに、国防予算が対前年費23%増と、このところ中国は一人軍拡に走っております。これは対外的というよりむしろ、対内的なところが大きい。こういう無理をしているんです。こういう矛盾をどうやって抑えることができるか。

それから最近、うまくやってこの「改革・開放」の潮流に乗った者と乗らない者、乗れる地方と乗れない地方の、貧富の格差がものすごいんです。中国社会の中で所得格差は10対1以上に広がっています。こうなると、例えばちょっとでも稼ぎのよいところへわあつと農村から人が移動しようとしみます。約日本の人口に相当する、1億2千万ぐらいの農民が毎日うろろうろしているわけですから、こういうことは社会の活力になると同時に不安定感をもたらします。

さっき言ったように、権力闘争がしばしば大衆運動化するという社会的基盤を中国は持っています。今はそれはひとえに鄧小平さんが抑えていると言っていいでしょう。そこはやはり鄧小平さんの権威なんですね。

ゴルバチョフさんもエリツィンさんも、革命第3世代です。鄧小平さんは革命第1世代ですから、創業者としての権威がありますね。だけど、その鄧小平さんもこの夏90歳。中国は鄧小平氏個人の人治の伝統があるところですから、ラストエンペラーなのかどうか、今の政策がもっと社会に構造化され、体制化されているのかどうかということが試される時期に、これから直面すると思います。

ですから私は決して、そう楽観はしていません。このまますんなり中国が今の体制のまま持続するとは思いませんし、そもそも中華人民共和国が成立してようやく45年です。中国の長い歴史の中では王朝の間に興亡する小さな国もたくさんあるわけで、まだまだ中華人民共和国というものの将来が確定したとは言えないでしょう。

つい先日もダライ・ラマさんが日本に寄りました。ノーベル平和賞を受けたチベットの生き仏、活仏で、今インドに亡命しているわけなんですが、日本はできるだけ厄介なことはやめようと、政府はできるだけ入れないように入れないようにと致しますから、成田に半日だけ滞在して記者会見して行きました。アメリカに行きますと、ダライ・ラマさんは大変な英雄ですね。

チベットというのは、どう見ても中国の漢民族の社会ではない。宗教も言葉も風俗も習慣も歴史も全て違うわけです。それを中国社会の中に組み入れようというのが中華人民共和国でして、そこに無理があります。

しかも全世界的には、ソ連の崩壊とともに、そういう国際社会の成り立ちの無理というものが、21世紀にかけて是正されて行く方向にあります。もう一度国民国家再編の過程を辿るでしょう。今のロシア、旧ソ連世界の混乱はその過程にあると見ていいでしょう。日本のような、単一民族意識の高い国家を基準に世界を考えるわけにはいきません。

中央アジアのトルコ系民族が中国の新疆ウイグル地区の少数民族と連動することは、充分あり得るかも知れない。そうときに、国家や社会が治まっていればいいけれど、中国はますます巨大になりますし、今言ったような社会問題をどうやってコントロールし得るかというのは大変なことになります。人口はもう13億くらいになっています。

そして、鄧小平は天安門事件をあのよう処理して「これは中国の内政問題だ」と言っていますけれど、世界はだんだんとそういうことが言えない時代になりつつあります。何と言っても全世界の動乱というのは、歴史の大きな過渡期なんです。言ってみればそれぞれの民族や集団が自分たちの意識を持ち始めているからこそ、紛争が起こるんです。独裁体制の下に治められているという状況ではなくなってくるから反乱が起こる。世界は長い目でみれば民主化の方向に、いろんな形でのデモクラタイゼーションに進んでいるんです。

それとともに世界は、広い意味での情報化が非常に進んでまして、これは中国国内のことだから、というわけにはいかない。いくら抑えようとしても抑えきれないものがある。外からの影響もあります。

かつて内政不干渉というのは平和五原則の一環で、弱小の独立新興諸国が列強の干渉を防ぐための手だてだったと思いますが、情報化時代、ボーダーレス時代の中では「内政問題だから何をやってもよい」ということができなくなりつつあります。それをやると世界的にも孤立します。

そういう時代になりつつある。その意味からも、中国の変化というものが大きな課題になって来ざる得ないのではないか。

ところが、中国はこの間ソ連や東欧の動乱を見ていますから、あんなペレストロイカだとか民主化なんてことに加担したらああいう風なことになるぞ、と抑えが効いていたんです。一方鄧小平さんが90歳。その権威が崩れたらどうなるか。

それから、万里の長城の北側はなんとか防ぐことができるのですが、実は南からは「南風」と呼ばれる温かい心地よい風が吹いてくるんですね。これはいわば紅い体陸を刻一刻と漂白しつつある。今や共産党というものを本当に信じている人がどれだけいるかという、それは建て前だけになってきてしまいました。

しかも、例えば福建省に行ってみると台湾のことが手に取るように分かるんですね。台湾はあんな小さな島なのに国民所得は1万2千ドル前後になっています。中国に比べて30倍から40倍も豊かな社会になっている。しかも民主化が進んでいて、選挙の時は口角泡を飛ばして国民党批判もするという状況を、福建省の人たちは本当に手に取るように知っています。

李登輝さんという人は、国民党の大陸から来た人ではなく、台湾が生んだ人です。しかも、学者としてもステイツマンとしても大変な人だということは、私が廈門の町の中でタクシーとか車の運転手の人に聞いてみても、知っております。

つい最近（平成6年3月末）、台湾と中国の間で不幸な出来事がありました。浙江省の千島湖というところで、計画的な犯罪で、遊覧船の台湾の観光客が大量に死去しました。その事を巡って中国側が責任をとろうとしなかったということで、台湾は大陸への観光・文化・経済などの人的往来を一切中止するという措置を取りました。今朝の新聞によると、しかしながら中国側も責任を感じて追悼会を開いて、李登輝総統にメッセージを宛てたということが出ていました。

こういう出来事がありました。大局的に見ると台湾から中国を訪れる人達は今後増大するでしょう。ちょうど天安門事件が起こった前後から大陸への近親訪問が始まりました。今、その延べ人数は5百万近くになります。台湾の4人に1人が大陸を訪れている。それらの人達は有り余るお土産を持ったり、お金をいっぱい持ったり、そして何よりも情報を携えて、福建省辺りに行くわけ。大変な量です。中国はあまり口を大きくして言いませんけれど、西側諸国が天安門事件で制裁して外貨がなくて観光収入が減って困った時に、実は台湾の人達がたくさんのお金をもって大陸に行ったわけですね。

李登輝さんはコーネル大学で農業経済学のph.D.を取りました。私も「台湾における農工間の資本移動」という彼の学位論文を持っておりますが、大変見事なもので全米農業経済学会最優秀賞に輝いたものです。京都大学でも学んで、西田幾多郎の哲学などについては非常に造詣が深い方です。そういう人が台湾で総統になったのですから、かつてのように大陸反攻などと無茶なことを言うのではない。台湾が国際社会の中で孤立している中で如何に成功してきたか、蒋介石独裁体制から蔣経国権威主義体制、そして李登輝民主体制への移行とい

う一つの政治発展のモデルを、大陸にも分かってもらおうという形で、大陸への訪問を自由化しているわけです。そのことの効果というのはすごく大きいのではないかと思います。

しかも福建省を始め、香港を経由する台湾からの貿易額がこれだけきわめて大きくなっている。なぜなら台湾は貿易大国としても中国にほぼ匹敵します。去年何年かぶりかで日中貿易が390億ドルと日台貿易より大きくなりました。けれど、その前の年は既に台湾と日本は340億ドルで、台湾と日本の貿易の方が大陸と日本の貿易よりもずっと大きいんです。それほどまでに経済が大きくなりました。外貨準備高は世界で一、二位を争っている。ですから台湾からの資本を中国は無視できません。

つまりこれは、言ってみれば南から同じ中華世界の同胞から吹いてくる風ですから、ソ連や東欧の経験とは違って、中国社会にとって非常に影響力の強い、中国社会の変化の要因であります。

もう一つ、香港もそうですね。香港はこれまた大変活力ある社会であります。広東人の世界ですから、福建人の世界の台湾とも違います。金儲けということにはもっともっと一生懸命になる広東人。新年の挨拶にも「発財（お金を儲ける）」ということを書いてはばからない広東人の世界。

中国の経済改革といっても、南から起こっていて深セン経済特区から起こってきます。まさに香港の影響があったからです。その香港の一人当たりのGNPは今イギリス本国を凌駕して1万8千5百ドルになります。この影響はものすごいですね。香港ドルはもう華南の通貨として流通してほとんど環流されないということは、もうあの6百万しか人口をもっていないけし粒のような香港がもう3年もすると完全に中国に吸収されるというのに、実は香港の経済的社会的影響は華南一帯に及びつつあります。これも南の風なんですね。

しかも香港は、これからみなさんも注目しなくてはいけないと思うのは、バッテン総督という恐らく最後の総督だろうと思いますが、香港の民主化、政治改革などということを出しました。

日本の場合は、細川さんとかもいろいろ頑張りましたが、最後はああいう形になりました。政治改革と言いましても、選挙制度改革、お金をもっときれいにしようということでした。

台湾の場合はものすごく難しい政治改革を李登輝さんは遂にやり遂げました。恐らく今度は直接の総統選挙が行われるでしょう。なぜ難しいかという、台湾は国民党という大陸から来た政党が大陸全体を支配しているという、行政上の言ってみれば虚構の上に立って、今の台湾、中華民国というものを作っていた。しかしながらそれを実質的に台湾人の政治・社会に変えていったわけなんです。ですから、万年議員でもうずっと大陸に帰ったことのない議決権を持っている国民代表などを全部入れ替えてしまいました。ひょっとすると、下手にやると台湾の存立というのがなくなるぐらい、あるいは一挙に台湾独立運動が起こるような賭なんですね。そこを一步一步政治改革をやって、実質的な台湾化を行っていたわけなんです。

香港の場合は、植民地社会ですから、そこに政治というものが全くなかった。中国人というのは政治というのを抜きにすれば、意外にうまくゆくなあ、というモデルでした。ひとたび政治を持ってくると、さっき言ったような権力闘争がすさまじい。

今、東南アジアのこの辺には、台湾、香港、中国の沿海地方を含めた東アジアの新しいビジネスカルチャー、コンピュータやきれいなカバンを持ったりする人が颯爽と飛び交っています。そういう状況の中で、政治というものが全然なくてよいのか、という問題が出てきます。そこで従来は総統の諮問機関であったり、立法評議会というものを一種の機会にしよう、そしてそういうものを選挙にしよう、選挙権を与えようというのが、最後の総督としてのバットンさんの提案なんですね。

これを中国は受けとめればいいんですが、香港はもともと中国が嫌になった人たち、共産党や革命が嫌な人たちが作った集団ですから、そんなことをしたら、明らかに返還されても中国のいうようにはならない。そこで、北京はものすごく抵抗しているんです。

私はバットン総督の立法評議会の演説の文章を持っています。実に立派なキングスイングリッシュで、装丁も実に立派で、そして厚いきれいな紙にバットンさんの演説があるんですね。日本の国会の総理大臣の演説などというのは大して立派なものではないのですが、これを見てああイギリスだなあと思いました。

イギリスのまさに植民地主義最後の総督、一世紀有余に亘るアジアへの進出に締めくくりを付けて、その歴史から退場しようとしています。この時にこの民主化提案をすることによって、最後はやっぱりいいことをしたんだという歴史を残したいんだ、というのがイギリスの意図なんです。ですから日本人だったら、あと3年で引き上げる所などどうなってもいいじゃないか、自分のことを考えて「後は野となれ、山となれ」と思うでしょうけれど、そこはやっぱりイギリスだと思いました。このバットン総督の演説そのものはそのままガラスに入れて大英博物館に飾ることができるものです。さすがにイギリスだと思いましたね。

今日の講演は「三つの中国と日本」でしたけれど、今こういう状況の中で、中国は変わりつつあります。今後も変わるでしょう。そして中国といえば中華人民共和国だけを考える時代は終わりました。香港、台湾とともに「三つの中国」を視野に入れた、経済規模をとってもほぼ三つが並列する、こういう全体の中で日本がどうあるべきだということ考えてゆくべきだと思います。

わが国はとかく中国というと、貿易をやると儲かりますか、とかそういうことですが、儲かりますかという発想を日本が持ったら、日本はとて中国には太刀打ちできません。お金を儲けるということにおいては天才的に中国の方がはるかに聡いわけですね。一枚上です。日本としてはもっと日本自身が歩んできた、あるいは21世紀にかけて人類にとって普遍的な課題は何なのか、という

ようなことを踏まえた上で中国とつき合う必要があるのではないかと思います。

かつて環境問題と言えば、毛沢東を礼賛する人たちとかそういう土着の土の匂いがするものを好きな人たち、エコロジスト、それから反体制、左翼の人たちのスローガンでしたが、いまやそうではないですね。全人類的な課題であります。今の中国は経済成長の反面、ものすごい環境問題がありますから、梅原龍三郎さんの絵にあるような「北京秋天」などというのは、もう望んでも望むべくもない。空はもう汚くなってしまいました。このままの中国でいいかどうかということは、やっぱり我々も日本人として考えなくてはならない問題がございます。

そういう意味で皆さんは、これからの中国が変化する状況を、当たり前に見て育つだろうと思います。そして中国の変化は、同時にアジアひいては世界の大きな問題になると思いますので、そういう意味で、今の私のお話が少しでもみなさんのお役に立ったとするならば幸いです。長い間ご静聴ありがとうございました。

質問 今マスコミで北朝鮮の核問題がすごく注目を集めていますが、北朝鮮は今後どのようなようになると思いますか。

今日は北朝鮮のことはお話ししませんでしたけれど、私自身は次ぎのように考えています。

まず核問題について言いますと、本当は核を持っているのどうか、そして核を持っていても、運搬手段まで備えて直接日本や周辺諸国に脅威を与えるところまで到達しているのかどうかということは、なかなか断定しがたいと思います。

一昨年もアメリカの国防総省のこの問題の専門家が、北朝鮮と中国の核の問題で私の意見を聞きたいと私の研究所に来ました。その時に「国防総省なんだからあなた方は全て情報を持っているだろう」と言いましたら、航空写真は確かにああいった形で撮っているけれど、本当のところは分からないと言っていました。

もしそうであれば世界的に大変な脅威になります。けれど逆に北朝鮮はものすごく孤立化しているわけですから、世界が核でもって騒いでくれること自体が、北朝鮮にとっては一つの存立のカードなんですね。まずそんな風に思います。

そして、中国は北朝鮮に影響力を与えることができるから、何とか北朝鮮に暴走しないように、I A E Aの査察を受け入れるように説得して欲しいというふうに西側諸国は考えているようですね。

それは間違っていると私は思います。なぜ間違っているのか。先程言いましたように、中国はある側面においては非常に物わかりが良くなってきて、自国の経済を発展させるために西側とは仲良くしようという政策ですが、肝心の共

産党体制を守るとか、中国の根本的な変化を防ぐということでは、北朝鮮と同じ立場にあると思うんですね。ですからそこは中国に期待しても、中国は期待通りには動かないだろう。私はこう思います。

ですからもしも今後国連総会でこの問題が論議されるときにも、あまり中国に期待するわけにはいかない。ひょっとすると、北朝鮮制裁という時にも、北朝鮮側に立つかも知れません。もちろんそれは北朝鮮と中国の間に矛盾がないということではないですし、北朝鮮自身中国を全て信頼しているわけではない。そこにはものすごく冷ややかなものがあります。

やはり国際政治というのは建て前の部分でかなり動きますから、そういう意味ではそういうものが表に出ている間には、北朝鮮と中国はかなりスクラムを組むのではないかという気がいたします。

私自身も、日本国際政治学会の東アジア分科会代表団長として平壤を訪れまして、たまたま今度の北朝鮮の人事の変動で外交委員長になった黄長燁さんと話をしました。かつての金日成大学の学長を15年もやり、最高人民会議の議長を務めた党書記、大変な要人です。日本統治下で苦学をして教育を受けた、日本語が非常にできる方です。

その時には私は敢えてこういうことを言いました。「台湾を見習ったらどうですか、あなた方がルーマニアのようになるのか、金日正独裁体制が倒れて民衆が反乱して北朝鮮がそういう断末魔に陥る。そういうことを、ある意味では西側諸国が予測もして、期待もしているような気配がある。それを本当に避けようと思ったら、台湾の道しかないではないか。」初めは目を丸くしていました。とにかく北朝鮮は台湾のことなどほとんど知らないわけです。台湾がこんなに豊かになって発展していることも知らずに、台湾は蒋介石反動政府のもとに...と言った、かつての冷戦時代の、しかも蒋介石時代のイメージしかないんです。

実は台湾というのはものすごく変わった。今の李登輝さんという人が出ていて、そして政治も民主化した、台湾は蒋介石独裁体制にあった。まさに蒋家一族が次のリーダーを決めた。現に蒋経国という蒋介石の長男が後継した。初めはイメージも良くなかったし、警察国家を敷くのではないか、独裁国家ではないかと言われたけれども、彼自身もなかなかの人物であった。

少し話が長くなりますが、蒋介石は蒋経国の実のお母さんである奥さんがいるにも関わらず、中国の四大華族の一つ宋家一族の、孫文夫人の妹である宋美齡を迎え入れるわけです。蒋介石としては一種の政略結婚かも知れませんが、家庭にはいろいろな問題が出てきます。蒋経国さんの実の親は家の中で粗末にされる。ある時には蒋介石が髪を引っ張って階段から蹴落とすようなこともあった。それを見ていた蒋経国は、15歳で家を出ます。

そして彼はコミンテルンに行って、当時の国際共産主義運動に身を投げるわけです。1924年頃から30年にかけて、彼はコミンテルンの中でも大変な指導者になります。そして「プラウダ」というソ連共産の機関紙に「人民の公敵蒋介石」という論文を書きます。自分の父親を人民の公敵として批判して、自分

の母に宛てたものとして公表されます。「母に会いたい。だけど自分は会うわけにはいかない。あなたは蒋介石にいかにもひどいことをされたか。蒋介石こそ我々が打倒すべき対象だ」と言うんですね。

最近明らかになりましたが、蔣経国は大変人望を得て、当時のソ連の国営工場の工場長になります。やがてスターリンの粛清の時代が始まり、スターリンの独裁体制下で彼はシベリアに送られるわけです。そういう状況から、彼はソビエトに幻滅して国へ戻ってきます。そして、父親とも和解します。そういう経過を経て、蔣経国は台湾を引き継ぐわけです。そういう人物であるだけに蔣経国の晩年はなかなか良かったんです。

ですから今の台湾の民主化というのは、今の李登輝さんが実行者ですけど、蔣経国の存在も無視できません。大陸訪問をゆるしたのも蔣経国時代です。

蔣経国は自ら「自分達の後には蔣家から出さない」ということを宣言しました。そして平民である李登輝さんを引き上げたんです。つまり台湾の政治発展というのは、蒋介石一族の独裁体制から蔣経国の権威主義体制、そして今の民主主義体制という風に移ってきているんです。

今のような話を北朝鮮の人たちは全然知らないのです。私は諄々と説きましたが、それにすごく共鳴を受けたようで、私の話をもう一度聞きたいと言うんですね。

私がそういう形で黄長燁さんと話し合った時のニュアンスからすると、北朝鮮においても、今はやむを得ないけれども、金日成から金正日への親子の権力継承を決して快く思っているとは思えません。だけど今は、とにかく金日成独裁主義体制を敷いていますから、恐らく、これは金正日に行くでしょうね。その時にうまくソフトランディングするかどうかは、金正日氏が果たして李登輝ほどの器であるかどうかにかかっていると思います。

ただ私が意外に思ったのは、日本にいますと、北朝鮮はすぐ明日にでも崩壊するというような見方がありますけれど、行って見ますと、そこには独裁体制のそれだけの現実があります。

ある意味では、金日成は自分を称えるために国有財産を全部私物化したという、批判の材料を将来与えるかもしれないような状況がありますから、金日成亡き後の北朝鮮もやがて崩れていく可能性が非常に高いと思います。

そういう意味では私は、北朝鮮も中国も含めて、革命第一世代の退場というあと数年から10年くらいのうちに必ず起こるであろう変化を契機に、ひょっとすると世界から社会主義、共産主義体制がなくなっていくのではないかと。キューバのカストロも頑張っていますが、もう彼もかなりの年齢になっていますから、恐らく21世紀には結局共産主義、社会主義というのは、まさに革命の世紀と戦争の世紀としての20世紀の遺産として語られる時代が来るのではないかと、そんな風に考えています。